Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 死生学 |
| Author(s) | 岩永, 剛 |
| Citation | 癌と人. 1997, 24, p. 15-17 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/23910 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 死 生 学

岩 永　　剛*

## 1．はじめに

私は，長年がん診療に従事し，多くの患者さんの死に立ち合ってきました。その中でも印象的な以前の4例については，別紙に報告したりしたことがありますが[1]，正直云って「人の死」についてそれほど真剣に考えたことがありませんでした。最近，次々と親しい友人や親族らと別れなければならないことが続き，さらに大学で若い学生達に「死」について講義をしなければならないという羽目にも陥いり，死生学Thanatologyを今頃になって勉強し始めることになりました。ここではその一部を述べさせていただきます。

## 2．死に対する感情，態度

まず，一般の日本人が「死」に対して抱く感情を記載してみました。これは，必ずしもこの順番で経過するとは限りませんが，実際に自分の気持ちを反省し，他の人を見ていてもこの通りの感情と態度をとるように思います。

### 1）無関心，無視，隠蔽，逃避，拒絶

「死」というものは嫌な現象であり，なるべく避けて通りたいという気持ちが働くために，「死」に対して無関心，あるいは無視しようとし，その現実から逃避しようと努めます。実際に今までは「死」に関する著書は何となく読みたくない，親しい方の「死」を見つめたくないと思っていました。時には「死」を覆い隠したり，「死」を否定して目をそむけたりしていました。

### 2）恐怖心

この無視したいという気持ちの奥底には「死」に対する恐怖心があるためと思います。動物は「死」ということをどの程度理解しているか判りませんが，危険を避けようという行動を本能的にとるように思います。古代の日本人は，死体を放置したり，死体を狭い孔に入れてその上に置き石を置いたのではないかという研究もあるようですが，死んだ人の怨霊がこの世にもどってくるということに対して恐怖心を抱いたのではないでしょうか。それらのことは神話からも伺えますし，神道では死を忌み嫌う思想があるように思います（但し，神道では自然の山とか岩などを神として祀ると共に，人も死ねば神になれるという思想があります）。このような影響からか，私も「死」に対する恐怖心を抱いていました。

### 3）闘争心

恐怖心が反対の気持ちになったものが闘争心だと思います。「死の病」に対してあくまでも闘い，これを乗り越えて生きてやろうという気持ちです。実際にがん患者が病気に対して持っている感情の中で，闘争心の強い人の生存率が最も高いというデータもありますので，ある意味では重要な感情だと思います。

### 4）虚無感，無常感

「死」が避けられないと判ると，あるいは周囲の人の死に接すると，日本人が昔から好むこの感情が芽生えてくるようです。

### 5）孤独感

「死」が近いと判ると，人と会いたくない，

* 大阪癌研究会一般学術研究助成選考委員，千里保健医療センター・理事長，藍野学院短期大学・客員教授

話をしたくない，一人にして欲しいと願う方もでてきます。

6）あきらめ

どうしても「死」を避けることができないとなると，最後に人は生に対してあきらめの境地に達します。

7）受容

これらの感情の経過の後に，「死」を受容するようになります。これは「あきらめ」に似ていますが，もっと積極的に「死」を受け入れるという気持ちです。宗教を信じている人はそれに生きますが，自分は無宗教だと思っている人でも心の中に大なり小なり信仰の気持ちを持っていて，ほとんどの方が「死」を受容するようになります。

## 3．死とは？

ここで，「死」ということをもう一度考えなおしてみると，次のような特徴と現実があるように思います。

1）不可避

「死」はどんなに偉い人でも，金持ちでも避けることができず，「人は必ず死ぬ」ということをもう一度確認するべきです。若い人の中には「死」ということは他人事だと思っている者もいます。

2）交換不能

「死」は嫌なので誰かに代ってもらいたい，あるいはお金で「不死」を買いたいと思ってもこれらは不可能であるということも認めなければなりません。昔の中国の皇帝が「不老不死」の妙薬を得ようと最大の努力をしたが徒労であったことも思い出さねばなりません。

3）未経験

「死」というのはだれも経験したことがない事件です。ですから経験談として人から聞くことができません。ただ，臨死体験をした人の話では，非常に苦しいというよりは，もう一人の自分が自分自身から抜け出して己を眺めているという離人現象を経験したり，きれいな光や花が見えたり，暗いトンネルの中を通り抜ける感覚であったという報告が多いようです。しかし，実際に死ぬ時もこのようになるのかは確かめようがありません。

人は未経験のことを経験する前には緊張し恐怖を抱くようです。

4）観念的事件

このようにだれも経験したことがなく，他人の「死」を見て「こうであろう」と考えているだけの観念的な事件だということです。

5）誕生との類似性

「死」というものは，人間のもう一つの大きなeventである「誕生」と似ているのではないかとも云われます。「誕生」は，すべての人が経験したことですが，その苦しみを覚えている人はいません。胎児は，母親の子宮の中で音を聞き，体を動かし，感覚を働かしているといわれますが，あの狭い産道を通ってくる苦しみを生後に訴える者はおりません。

人は死ぬ前に苦悶状を呈する人もいますが，そのほとんどのことは感じていないのだと説明する学者もいます。

6）生物学的現象

人間の「死」というものを生物学的に定義するのは難しいものです。以前は，心拍が止まり，呼吸運動がなくなり，瞳孔が散大することで「死亡」と診断していました。最近は，脳死ということも討議され，「死亡」の定義は複雑になってきました。さらに，人は体の中の組織によって「死亡」の時間に差があり，髪や爪のように「死亡」と診断された後もなお数日間にわたって成長し続けます。このように見てくると，人の「死」というものは，何を以て決定するのかは難しいようです。すなわち，「死」ということはある一瞬でなく，徐々に「生」から「死」へ移行するといえます。

7）哲学的観点

昔から多くの哲学者が「死」というものにつ

いて熟考してきました。フランスの哲学者デカルトが述べた「我思う故に我あり」という観点はよく理解でき，人は自分の存在を考えることができなくなれば，既に自分は存在しないのではないかと思います。しかし，20世紀最高の哲学者といわれるハイデッガーの実存論[2]については，なお理解することができませんでした。古代ローマの思想家アウグスティヌス[3]が説いた「時間」の非存在論は判ったような気になりましたが，「生命」の実存論については今後も勉強していきたいと思います。

8）宗教的観点

昔から人は「死」について真剣に考慮し，各種の宗教を興し，それぞれ信仰し，心を鎮めてきました。各教義は極めて奥深く，その真理を究めることは一朝一夕にはできませんが，それぞれすばらしい力を持っているようです。日本では，鎌倉時代に一般民衆も入り込めるような判りやすい教義を説いた鎌倉仏教の開祖が輩出しました。現代でも多くの新興宗教が次々と新生するのは，人々が心の迷いを何かに求めようとしていることが一因と思います。

やはり「死」については宗教に救済を求めるのが一般の人の自然の道のようです。多くの日本人は無宗教と考えていますが，神仏を散い，死後の世界を考えたりして，心の底では自然に宗教心に包まれて生きているように思います。

## 4．おわりに

人の「死」について僅かですが勉強したおかげで，この世から肉体が消滅してしまう「死」というものを静かに受けとめられるようになったように思います。「死」を恐れることも少なくなり，親しい友人との最後の別れとなる面会に於いても楽しく談笑できるようになりました。しかし，やはり別れはつらく，最後に握り合った手のぬくもりは忘れることができません。今後も一層勉強・修養して死ぬ直前には「幸福であった」と云えるように，また人やものごとに感謝できるようになりたいと考えています。

## 文　献


1）岩永　剛：患者と私――患者さんの死から学んだこと。Practical Oncology, 1997年（印刷中）。

2）ハイデッガー（桑木務訳）：存在と時間。岩波文庫

3）山田晶編：アウグスティヌス。世界の名著16：P412-414，中央公論社，1978年。